

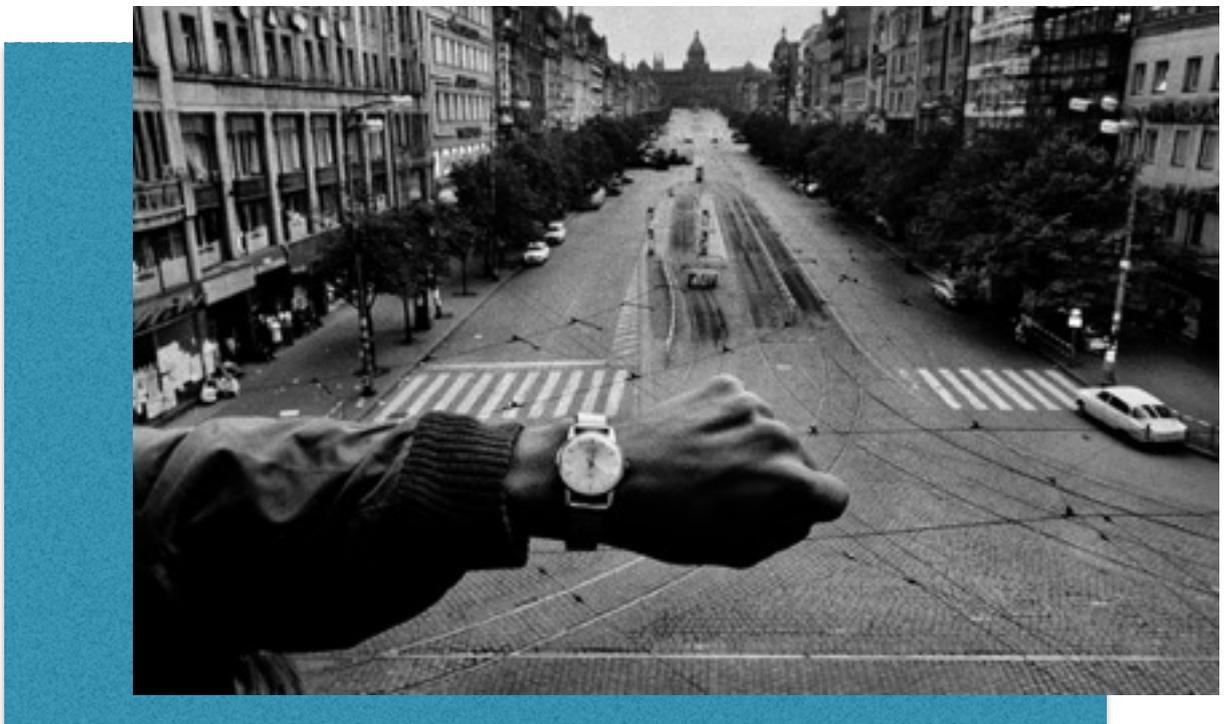
第一回：“プラハの春”を超えて 1960-80年代の歴史・文学再考

2016年8月4日(木) 10:00 - 18:00

会場：大阪大学 豊中キャンパス 文学部棟 ドイツ文学研究室

初の研究会となる8月4日の会合では、林忠行氏を招いた講演会を行います。研究会の表題でもある「プラハの春」事件について学び、議論の前提を共有します。午後からは、「プラハの春」および1968年にまつわる大学院生三名による研究報告を行い、「プラハの春」や運動の中心となった世代にまつわる二つのテキストを読み意見を交わす時間を設けます。

参加をご希望の方は、配布物がありますので、事前に島田淳子(jkosda@gmail.com)までご連絡ください。当日は昼食を参加者全員分準備する予定です。懇親会のみ参加も受け付けております。



“On 22 and 23 August, Wenceslas Square was cleared of people” from Invasion 68 Prague by Josef Koudelka/Magnum Photos (Aperture)

プログラム

10:00 講演：林忠行（京都女子大学学長）

「チェコスロヴァキア戦後史の中の”プラハの春”—1948年革命と1989年革命のはざままで」

12:00 昼食

13:30 研究報告

吉野裕太（大阪大学 文学研究科 ドイツ文学専攻 修士課程）

報告題目：初期H.M.エンツェンスベルガーの「文学」観の推移

本発表では、H.M.エンツェンスベルガー(1929-)の文学に対する捉え方に焦点を当て、1957年から詩人として活動していたエンツェンスベルガーの文学の果たすべき役割の変遷を辿る。彼は1968年に「文学の死」なる宣言を発表するが、今回の発表では、それまでの経緯と、その後の彼の文学観について発表する。

杉山杏奈（中央ヨーロッパ大学 歴史学部 博士課程）

報告題目：“甘やかされた子供たち”と“ガラパゴス諸島”の住人—1968年以降ポーランドにおける大学知識人の変化と社会的文脈

本発表では、戦後ポーランドにおける知識人の変遷について、1968年「三月事件」前後から「連帯」運動が高まりをみせる1980年半ばまでに焦点をあてて考察する。特に、大学や学問の場を中心に展開された運動とその参加者たちの不満の諸相を描くことで、これまで同質性をもとに論じられてきた知識人における世代間の相違を明らかにする。

島田淳子（大阪大学 文学研究科 ドイツ文学専攻 博士課程）

報告題目：羊皮紙としての歴史—L.モニーコヴァー『ファサード』における後期社会主義—

小説『ファサード』では、1980年代、プラハ出身の4人の芸術家が地方都市リトミシュルに派遣され、城壁修復に従事する様が描かれている。本発表では、チェコスロヴァキア出身の作家リブシェ・モニーコヴァーが、この極めてローカルな物語を移住先の西ドイツでドイツ語を用いて執筆した意図を考察する。

15:30 “プラハの春”を読む

配布テキスト

1. 福田宏 (2015) 「第9章 チェコスロヴァキア—プラハの春」(西田慎・梅崎透編『グローバル・ヒストリーとしての「1968年」世界が揺れた転換点』255-278頁, ミネルヴァ書房)
2. Karol Edward Sołtan. “The Divided Spirits of the Sixties”, in *Promises of 1968, Crisis, Illusion, and Utopia*, ed. Vladimir Tismaneanu (Budapest: CEU Press, 2011), pp. 131-154.

17:00 参加者討議：今後の研究会運営について

18:00~ 懇親会

“プラハの春” 研究会について

本研究会は、1968年にチェコスロヴァキアで起こった「プラハの春」をよりどころに、1960年代以降の社会の変化、世代の変遷、文化潮流などについて議論する場を設けるために発足しました。「プラハの春」という東欧ブロックから起こった改革運動が戦後史におけるひとつのターニングポイントであったことは広く知られています。そして、その運動の内実、運動がもたらした文学や歴史観への影響などを考えていくと、この事件が広い射程をもつ文化的事象であったことが見えてきます。各会合では、事件としての「プラハの春」ではなく、1960年代から現代にいたる世界状況を分析するための視点としての“プラハの春”について考え、その言葉が喚起するイメージを媒介におのおの研究と問題意識を共有できる場をつくっていきたいと思っています。

また、研究発表の方法なども参加者と共に考えていくことも目標です。個人で現在考えているけれどもなかなか突破口の見えない研究上の課題についての経過報告や、一度書いたけれどどこから直してよいかわからない原稿の検討など、いままさに自分が思考錯誤していることを他人と共有できるプラットフォームとなることも研究会は目指しています。ヨーロッパ近現代史や文学の専門家のみならず、多くの人に参加してもらえるようにするつもりです。

研究会担当者：杉山杏奈、島田淳子